



名越坂の切通し 鎌倉七口の一つ、七切通しともいう。三方を山に囲まれた鎌倉は、急峻な坂道を都市防衛の重要拠点とした。

10

鎌倉幕府と武蔵国

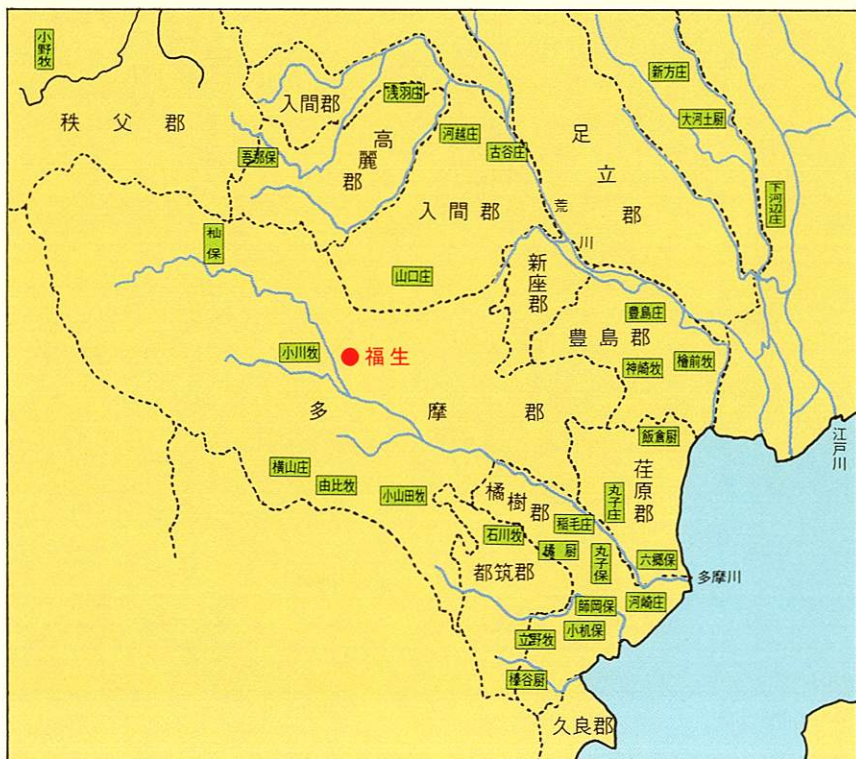
■武士団の発生

八世紀半ばの奈良時代、それまでの土地公有の原則が崩れはじめ、平安時代中期に律令体制が崩れ、りつりょうたいせい 荘園・公領制が発展した。荘園というのは、貴族や社寺の私的な領有地のことであり、公領というのは

は、朝廷や国衙、幕府、大名などの統制下にある土地のことである。荘園は全国に広がっていき、このような社会の変化のなかで、武士階層が成長し、武士団が発生してきた。

武士となったのは、王朝国家の地方行政機関であった国衙に勤めるごんごう 在庁官人や、荘園の管理者である荘官たちであった。在庁官人は、その地位を利用して国衙の直轄地に土地を開発、荘園として経営し、繁栄した。また、荘官は自分で開発した土地を中央の貴族や寺社に寄進して荘園領主として仰ぎ、そのもとで直接管理者である下司職、げすしやく 預所職などに任命された人たちである。

このような人たちは、領地や領民を守るために、一族を武装させて戦闘の技術をみがかせた。これらの武装した人びとが集団化したのが武士団である。当初は小さかった武士団は地縁や血縁によって結合し、しだいに大きな集団へと成長していったのである。

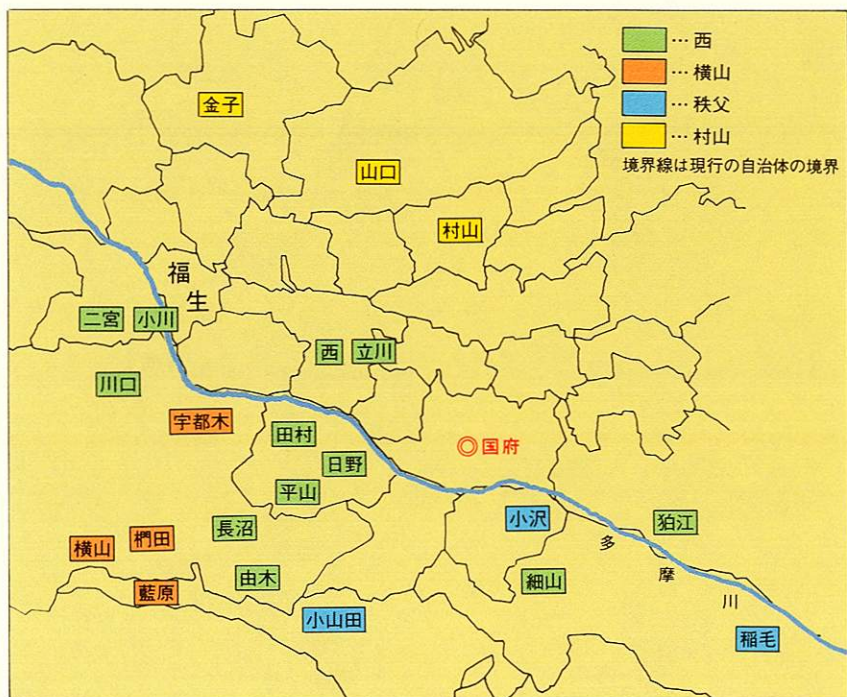


多摩川流域荘園分布(奈良～室町時代)(加藤 功「武蔵国荘園分布図」『武蔵野』300号参考)

■武蔵国の武士団

武蔵国には大小さまざまな武士団があったが、そのうちで最大のもの、秩父地方から荒川流域を中心に、武蔵野一帯に展開した秩父党であった。このほかにも武蔵七党という武士団があった。武蔵七党は史料により呼び名や数が異なるが、「武蔵七党系図」では丹治、野与、兎玉、猪俣、日奉(西)、横山、村山の七つの集団をあげている。

当時の多摩郡は古代行政の中心である国府があったため、在庁官人(ざいじょうくわんじん)を出自とする武士団が多かった。横山党、西党、秩父党の一部などがそうである。西党は多摩郡西部に勢力をもっていたからそうよばれたが、日奉氏から派生した武士団であった。日奉氏は武蔵国衙の在庁官人で、やがて二つの系統に分かれた。その一つの系統に属する氏族に、このあと登場してくる平山氏や小



多摩郡の武士団

川氏がある。

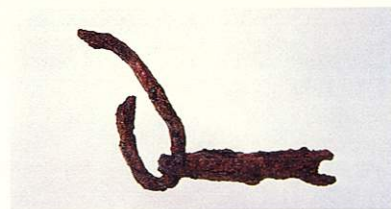
■頼朝、鎌倉幕府を開く

一一八〇年（治承四）、源頼朝は平家打倒の兵をあげ、やがて鎌倉に本拠をおき東国の経営を進めた。壇の浦の戦いで平家一門が滅んだのは一一八五年（文治元）のことであるが、その八年後の一一九二年（建久三）、頼朝は征夷大将軍に任じられ、鎌倉に幕府を開いた。鎌倉幕府の初期の政治機関は、官僚が政務にあたる体制をとっていたが、事実上は鎌倉殿（将軍）の独裁的色彩が強かった。地方には守護・地頭、京都に京都守護、九州に鎮西奉行、奥州には藤原氏滅亡後、奥州奉行をおいた。

源頼朝の勢力は一一八九年（文治五）、奥州藤原氏征伐のあと、はじめて全国に及ぶようになった。その影響力がもっとも大きかったのは、もちろん東国であり、東国での幕府の強みは、この地域の地方武士たちを自らの下に組織したことであった。



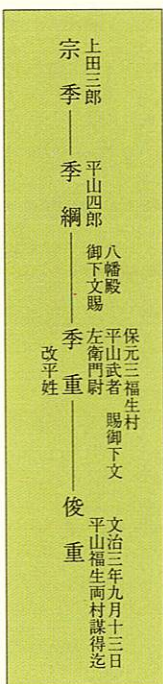
平山季重坐像(日野市 大沢山宗印寺所蔵)
『平治物語』に平治の乱で内裏に立てこもった義朝に従う武蔵武士のおもだった者の一人として平山武者季重と出てくる。



馬具・銜(くつわ)の一部(写真はあきる野市教育委員会蔵) 小川の牧があったといわれる多摩川と秋川の合流点、秋留野台地の南縁に位置する雨間地区遺跡群(あきる野市)から馬具の一部で、馬の口にくわえさせて馬を使う具である鉄製品の銜(くつわ)が出土している。現存長7.8cm断面は1.2cmから1.0cmの不正な円形をなし、重さは34.7gである。形態はごく一般的な2連式の銜の一半で、内径1cmの銜環に棒状鉄製品が通った状態で出土している。棒状鉄製品は現長14.5cm、重さ14.6gで、変形しているけれども引き手に連結する遊環と推定される。

ないのではつきりしたことはわからない。

その後の「小川系図」の記述によれば、平山武者と称した季重が一一五八年(保元三)左衛門尉に補任されて福生村に関する下文を与えられ、一一八七年(文治三)九月十三日に、平山・福生両村は季重から俊重へ継承されたとされている。したがって、このときの福生村の領主は、平山季重、俊重父子であったことがわかる。平山氏は保元の乱(一一五六年)に際して源義朝に従って戦っており、このときの恩賞として、季重が福生村を義朝から与えられたと思われる。



日奉氏略系図(薩摩国甌島、塩田所蔵)